

『8番出口 小説』 川村元気 水鈴社

累計 180 万ダウンロード、全世界で社会現象になった無限ループゲーム「8番出口」を、監督・川村元気 & 主演・二宮和也の黄金タッグで実写映画化！ この本は、監督自ら書き下ろし小説化し、映画公開前に刊行されたものです。

「出られない」。いつの間にか「8番出口」の黄色い案内パネルのある白い地下通路に迷い込んだ主人公。そこから歩き出すのだが、何回歩いても0番の案内表示の所まで歩くと、またスタート地点にループしてしまうのだった。一人のおじさんもずっと歩いていて、何度もすれ違う。ポスターを眺めていると、天井に血溜まりができて、頭上へと落ちてきた。ひっ。慌てて道に戻ると、案内表示が0から1に変わっていた。よく見ると、隣りに案内板がある。それにはこう書かれていた。「異変を見逃さないこと」「異変を見つけたら、すぐに引き返すこと」「異変が見つからなかったら、引き返さないこと」「8番出口から外に出ること」どうやら、異変を見つけ出して引き返すと、案内表示の数字が一つずつ上がって行って、8番出口から出られるらしい…。

『新・教場』『新・教場2』 長岡弘樹 小学館

「犯人も、刑事たちも、その目に見抜かれていた」。キムタクが鬼教官（警察官にはなりたくないという人を増やしましたw）・風間公親^{きみちか}を演じて大好評につき、ついに映画化！ TVドラマに続いて、警察学校第九十四期初任科短期課程の教官となったばかりの風間公親が描かれます。刑事の教官である刑事指導官だった風間を、彼を付け狙う“千枚通し”の異名をとる戸崎という犯罪者から匿うための人事だった。風間が義眼になったのは彼の襲撃のせいである。通常であれば、助教を数年経験しなくては教官にはなれないのだが、特別な存在である風間はいきなり警察学校^{おなき}の教官になるのだった。助教になってまだ2年目の尾風が彼の下につくことになる。風間と尾風、「風」と「凧」で正反対の名字だが、ここで学生を指導する際は、厳しく締め付ける「風」の役割は尾風が、その様子を静観する「凧」を風間が担当しようと風間は提案した。かくして、新しい風間教場が始まった…。続編の最新作もリリース！

『マスカレード・ライフ』 東野圭吾 集英社

で、こちらはキムタクがホテルマンに扮した刑事を演じ、映画も大好評だった<マスカレード>シリーズ最新作！前作で警視庁を辞め、ホテル・コルテシア東京の本物のホテルマンとなってしまった新田浩介。のんびりとした日常が始まろうはずもなく、捜査一課の梓のご指名により、また厄介事に巻き込まれることとなります。明後日の午後に、「日本推理小説新人賞」の選考会が行われる。選考会は別のホテルで行われる予定だったが、2週間前に急遽コルテシア東京へと変更となった。その賞の最終候補作の作者が殺人事件の重要参考人であるので、捜査活動に協力してほしいというのだ。彼の書いた作品が受賞するのはほぼ確定している。だが、居場所がつかめない。ネットで応募してきたからだ。本名で。記者会見の終了後に、警視庁の代表が任意同行を求めるという手はずだそうだが…。ホテルの保安課長となった新田浩介が、お客様の安全確保を第一に新たな活躍をみせる！

『ブラック・ショーマンと名もなき町の殺人』

東野圭吾 光文社

「手段を選ばず、手品のように華麗に謎を解く」。映画化！福山雅治といえば、ガリレオのイメージを定着させた俳優ですが、なんとまた東野作品で新しいヒーローを演じます。今度の<探偵>は超一流マジシャン！なのですが、金に細かかったり、平気な顔で嘘をついたり、一癖ある人物。「一体どういう人格をしているのか。推理力はさておき、人間性は最低ではないか。まるで詐欺師だ」。福山の「ダークヒーローを演じたい」という声が、東野にこのようなキャラクターを創らせたのだそうです。

2か月後に結婚式を控える真世は、中学の同窓会の出席を迷っていた。父親の英一が先生だったために、あまりいい思い出がないのだ。コロナを理由に断ってしまおうかと思っていたところ、早めに地元に戻ってきている者もいるらしい。大ヒットマンガを世に送り出した同級生のなかでのいちばんの有名人、釘宮君もその一人だそうだ。何も目玉のない観光地である故郷の町はアニメ化したそのマンガを町おこしの起爆剤にしようとしていたが、コロナのせいで頓挫したそうだ。返事を保留にしているなかで、警察から父親の英一が殺されたと連絡を受ける。犯人はわからず、犯行現場も謎だらけの状態だ。そんなところに颯爽と現れたのが、英一の弟の武史だった。「俺は警察より先に、自分の手で真相を突き止めたいと思っている。警察にはできないが俺にはできるということもあるしな」。真世は、父親殺害の謎を解くために、うさんくさい叔父を頼るが…。

『あの星が降る丘で、君とまた出会いたい。』

汐見夏衛 スターツ出版

『あの星が降る丘で、君とまた出会いたい。』は、『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』の完結直後に書き始めました。私の中では、百合と彰の物語は『あの花』ではまだ終わっておらず、『あの星』までがひとつの物語だと思っています」（著者）。『あの花』の続編『あの星』が映画化決定！

「こんな時代でなければ……」「生まれ変わったら一緒になろう」「絶対に、また君を見つけるから」。

中2の涼には、物心ついたころから、繰り返す見る夢があった。きれいに晴れた大空を、鳥になって飛んでいる。あるいは飛行機を操縦していることもある。とにかく空を飛んでいる自分に、丘一面に咲き乱れている百合の花に囲まれて、こちらに背を向け、星空を眺めている女の子、背中まである長い黒髪がさらさらと風になびいているのが見えるのだ。その女の子のことはまったく知らないというのに。父親の会社の都合で転校することになった。学校に挨拶に行くと、ひとりの女の子が立っていた。時の流れが、止まったような気がした。なぜか、夢のなかの顔も知らない女の子を思い出した。そんなはずはないのに、「やっと見つけた」と、自分でも意味不明な思いが込み上げてくる…。

「夢を見られるのも、それを叶えるために必死になれるのも、すごく奇跡的なことなんだよ。私たちは、今の日本に生まれたから、好きなことに熱中できるんだよ」。

『黙って喋って』 ヒコロヒー 朝日新聞出版

「国民的地元のツレ」ヒコロヒーが小説を書いた！ しかもそれがなんと処女作にして島清恋愛文学賞を受賞してしまいました！

『もう黙って』『もっと喋って』と思わずにはいられない、もどかしくて愛おしい掌編18編。恋をすると人は愚かにならずにはいられない。愚かな人たちが、「恋愛あるある」にとどまらず、圧倒的なリアリティを持って描かれます。各章のタイトルは、作中のセリフから採られています。

例えば、冒頭の「ばかだねえ」。「ごめん。俺が最低だったと思う」。浮気され、嘘をつかれ、お金を貸してほしいと頼まれ、何度も裏切られてきた理玖。いつも彩香が許してきたが、また裏切られたとき、かつて大事にしてくれた記憶にただすがりついていたことに気づく。ツレにそれを伝えると「ばかだねえ」。

ヒコロヒーさんは、「共感しました。と言ってくれる人たちには必ず、おい何を言う tonじゃ、幸せになってくれよと言っていた」そうです。題名も「しゃんとせえよ」にしたかったそうw。

『涙の箱』 ハン・ガン 評論社

ノーベル文学賞作家のハン・ガンさんとあの junaida さんが夢のコラボ！ ハン・ガンさんの大人のための童話に、junaida さんが挿画と挿絵を描きました！

ある村に、名前ではなく「涙つぼ」と呼ばれる子どもがいた。泣いてばかりいるから涙つぼなのだが、不思議なのは、みんながまるで予測も理解もできないところで涙を流すことだった。ある日、黒い服に黒い帽子を深くかぶったおじさんが村にやってきた。背中には大きな古びたバッグを背負い、片手には大きな黒いバッグを持っていた。おじさんは「涙を集める人」だった。この村に、特別な涙を持っている子がいると聞いて、やってきたのだった。涙つぼを見つけると、おじさんは「私が持っている涙を、見たくないかい？」と尋ねた。おじさんのカバンのなかには大きな黒い箱がシルクの布に包まれて入っていて、リボンをほどいて箱を開けると、箱のなかには黒くふわふわしたビロードが敷かれていて、大きなものや小さなもの、形もさまざまな涙が宝石のように陳列されていた。だが、おじさんにも持っていない涙があった。それは「純粋な涙」。世界で最も美しい涙で、その涙にふれるだけで、どんなに固く凍りついた心でもゆっくり溶けはじめるのだという…。

『自分は「底辺の人間」です 京都アニメーション放火殺人事件』 京都新聞取材班 講談社

新聞協会賞受賞作！ 2019年の夏、『ハルヒ』『けいおん！』など熱烈なファンを持つ世界最高峰のアニメスタジオ「京アニ」に火が放たれた。36人が死亡、32人が重軽傷を負った。最悪の大量殺人である。なぜ才能あふれる36人もの命は奪われてしまったのか。この本は36人の追悼のための本であり、このような惨劇をひきおこした容疑者の実体に迫った本である。

小3のときに両親が離婚し、子ども3人は父親に引き取られた。だが、父親は持病の糖尿病が悪化し、仕事を辞めざるをえなくなる。一家は困窮した。父親から暴力を振るわれるようになった。中学で不登校になり、フリースクールを通じて、定時制の高校を卒業し、東京の専門学校に通うが、半年で自主退学してしまう。20歳から7年あまり、コンビニでバイトをするが、「底辺の論理」と呼ぶ彼の考え方を目覚めさせることになる…。

「あなたが人生で苦労したことは理解できます。でも今回、あなたの行為で、苦しい人生を歩まなければいけなくなった人が、何十人と増えたことは知ってほしい。私たちが、あなたを許すことができると思いますか」。